

作品の閲覧

2026-7-22

『迷惑な終活』

何でも読もう会

書物名	『迷惑な終活』	開催日	出席者
作者	内館牧子	7月22日	4名
＜作品の内容等＞ 主人公の原英太は75歳。妻からはエンディングノートなどの終活を勧められる。 「なぜ活着ているうちから死の準備をしなければならないのか」と、無視している。死後に残された人が困らないようにする世に言われる終活ではなく、自分自身が「気がかりなことややり残したことやり、自分の人生にケリつけることだ」と考える。英太のやり残したことは、高校時代に憧れたマドンナ向山あかねに謝ることであった。 同級生を頼って向山あかねに連絡を取り、会う約束をする。その場に田村日出子も同席した。 あかねは嫁の加代とうまくいかず、愚痴話を聞かされる。日出子は英太が単身赴任で新潟にいたときに半同棲生活をしていたことに何ら触れないことに心の中で不満があった。そのことから思わぬ行動に出て日出子としての終活をする。 いろんな人の終活の様子が描かれていくが、圧巻は『妻の礼子の終活だ。それは「横浜の中心部にマンションを借りて、週の内三日だけ一人で暮らす。その三日間はぜーんぶ自分のための時間。残り四日は今まで鳥の生活」というものだ。 ＜皆さんの感想意見＞ - よく言われることに、「高齢者が人生で一番の資産を持つのは死んだとき」。これじゃ人生つまらない。もっと好きなことに金を使って満足して死を迎えたいものだ。 - 奥様の礼子さんの気持ちがよく解る。夫は近所の居酒屋に行き大いに楽しんでいるのだから、妻も自由になりたいもの。 - 日出子さんが面白かった。結婚をせずに亡くなった内館さんのような感じがした。 - 著者は、終活とは死ぬ準備だけでなく、自分の人生を納得するための活動もやるべきと、言いたかったのでしょう。 等々			

